『日本の熱い日々　謀殺・下山事件』考

長谷川哲也　三重映画フェス

１９８１年　俳優座映画放送　１３２分
監督　熊井啓
脚本　菊島隆三
出演　仲代達矢、山本圭、隆大介

熊井啓は、『帝銀事件　死刑囚』『サンダカン八番娼館　望郷』『日本の黒い夏―冤罪』など、社会派作品を多く撮ってきた。

この作品は、昭和２４年7月6日未明、国鉄総裁下山定則が、足立区の常盤線と東武伊勢崎線が交差するあたりで、轢断死体となって発見された後、いくつかの謎を残したまま迷宮入りした事件を題材として、独自の視点も加えながら、占領下における日本社会を鋭く描いている。

昭和日報（新聞社）は、東大法医学教室の見解をもとに、他殺であると判断し、矢代記者（仲代達矢）を中心にそれを裏付けるため、取材活動を展開していく。矢代は法医学教室や東京地検に嘱託として入り込んで、線路に残された血痕を発見したり、下山の衣服に付着していた油と色素の出所をつきとめたりと多大な成果を上げる。

ところが、線路内へ突き飛ばされたり、捜査に対する脅迫状が送りつけられてきたり、地検で捜査の指揮をとっている者を人事異動でとばされたりと、捜査の出鼻がことごとくくじかれる。しかし、黒幕は姿を見せず、「警察イコール必ずしも犯人の敵でない」（矢代とコンビを組んで捜査にあたる刑事（山本圭）のセリフ）を裏付ける出来事が、次から次へと描かれている。このあたりの熊井演出は見事であり、恐怖感をあおっていく。

しかし、映画作品である以上、話の筋を明確にする意味もあり、後半、下山の死体を運んで、線路に寝かせた男（隆大介）を登場させ、証言させている。ラストでは、その男も線路内に落ちて亡くなってしまう。事故死かそれとも・・・。

国家にとって不利益とみなされる者は葬られていく。それを実行する闇の組織が、現実に存在するのでは？緻密な演出と迫真の演技によって、そうしたことを考えてしまう作品に仕上がっている。見終わった後、背筋が寒くなるのを感じた。

余談であるが、下山定則は明治３４年、兵庫県で出生しているが、大正八年三月、三重県立津中学校(現　津高等学校)を卒業している。